

消えゆく足

夏の白昼

茹だるような景色を

眺めて

言葉を失う

この真っ白い

無機質な

四角い箱は

少しずつ

私を

麻痺させていく

真新しい

ここには

何も宿っていないのに

夜になると

たちまち

魂の叫びが

小玉する

行き場のない

叫びは

今日も